

Title	植民地貨幣制度より見たる金爲替準備
Author(s)	松岡, 孝兒
Citation	經濟論叢 (1934), 39(1): 117-136
Issue Date	1934-07-01
URL	http://dx.doi.org/10.14989/130463
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號 一 第

卷九十三第

行發日一月七年九和昭

論 叢

狩獵免許税に就きて

法學博士 神戸正雄

生産力の問題

文學博士 高田保馬

昭和五年の我が國民所得を論ず

經濟學博士 沙見三郎

時 論

日濠貿易の調整

經濟學博士 谷口吉彦

研 究

工場委員會の型の生因

經濟學士 大塚一朗

貨幣的景氣論史

經濟學士 柴田敬

植民地貨幣制度より見たる金爲替準備

經濟學士 松岡孝兒

記 事

經濟學部創立十五年記念會記事

同上 記念展覽會陳列圖書目錄

附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

植民地貨幣制度より見たる金爲替準備

松岡孝兒

一、序 言

一國の貨幣制度に於いて金爲替準備を構成する金爲替が、其の發行國及び所有國間の關係に重大な意味を與へるものであることは、世界大戰後、多くの國々に於いて採用された金爲替準備に關する經驗の明かに語るところである。

之において金爲替に認識された特性は二つある。その第一は支拂信用的關係に於いて、極めて顯著に示された特性である。蓋し、世界大戰後、金を所有せざる國又は金の缺乏せる國は、その對外支拂決濟のため金爲替を所有し、又は貨幣制度上之を發券準備として本國に於ける銀行券を發行したからである。然るに、この金爲替は其後更に第二の點、即ち貸付信用的關係を其の特性として示すに至つた。そしてむしろ、金爲替の本質からいへば、金爲替の貸付信用的關係こそはかへつて金爲替の重要な特性を示すものであると考へられるに至つた。其の實例は一九二八年以後に於ける謂はゆるフランスの金偏在問題を通じて周く人の知るところである。^{*)}特にこれにより多數の金分量を所有するに至れるフランスが、或はオオストリヤのクレヂット・アンシュタルト

1) Piétritz, M: Le Gold Exchange Standard et ses déviations, pp. 66—72, pp. 130—134.

*) Baschwitz, J.: La répartition mondiale de l'or, pp. 53—66.

問題に於いて、或はドイツのダナアト銀行問題に於いて示せる貸付信用の引上は何を語るか。*) 或は又この間に於いてフランスがイギリス及び北米合衆國よりそれらの國の金を流出せしめたる事情は何を語らねばならないか。これ皆金爲替がたとひそが一の支拂信用として設定され、貨幣制度上一の金爲替準備として取扱はれてゐるとしても、實際そは一の貸付信用的特性を有つものであつて、かくてその移動の行はれるに於いて或は意識的にせよ、又は無意識的にせよ、屢々世界の經濟的渦紋の中心を形成するに至る。

ル・ブランシウ²⁾及びピエトリツチ³⁾のごとき、此點について、次の如き意味を述べてゐるが、蓋し、そは寔に當然といふべきである。

その第一の場合は金爲替所有國が、若し金爲替發行國に對し、その經濟的勢力關係が劣位なる場合に於いては、換言すれば兩國間の取引が金爲替發行國又は發行國の仲介によつて行はれるとき、即ちその發行國が自國に於いて自動的信用政策に基き、その取引の發展を確保し得るときに於いては、その發行國は、その必然的結果として、その發行せる金爲替の所有國に對し、その金爲替發行の程度に應じ、一定の支配的關係を生ぜしめるに至る。

然るに其の第二の場合は之に反する、即ち若し、金爲替所有國が、その金爲替發行國に對して、これと同等又は少くも之と獨立せる經濟的勢力を有するとき、換言すれば、その金爲替所有國の經濟が、その金爲替發行國のそれと獨立して管理されるときは、當該金爲替所有國は、その

2) Le Branchu, J.-Y.: Essai sur le Gold Exchange Standard p. 124.

3) Piétritzi: op. cit. pp. 132—133.

*) Baschwitz, J.: op. cit. pp. 89—100.

** Baschwitz, J.: op. cit. pp. 101—112.

*** Baschwitz, J.: op. cit. pp. 66—87.

金爲替發行國に對し 一定の經濟的影響を與へ得るものであり、かくてこの金爲替の所有が金爲替所有國に於ける少數者の手に集中される場合に於いては、當該金爲替所有國は金爲替發行國に對し、その所有する金爲替を以つて武器とし、前の場合とは逆に、一定の支配的關係を生ぜしめ得ることとなる。

我々はかくのごとき二つの傾向の示す作用よりして、金爲替従つては金爲替準備なるものは、世界經濟の展開上、最近に於いて如何なる地位を占めたか、又現に占めつつあるかを知ることができる。そして、その意味するところによれば、それは金爲替が常に世界大戰後此の問題に熱心な人々によつて（例へばムリナルスキ⁴⁾のごとき）説かれたることく、單に國際金融上の技術的方面に於いて重要な問題であるばかりでなく、更にそれは著しく政治上及び經濟上の要素を含んでゐる重大問題であることが洞察された。⁵⁾従つて此等の事情は、金爲替を以つて單に金融技術的視角からのみ把握せんとする人々に對し、其の熱意ある改革乃至改良の意圖が示されたにもかかはらず、それが齎した結果は少からず之に反するものあることを示し、即ち此點より云へば、元來世界大戰後に於ける金爲替準備の示せる客觀狀態は、その當然有つべしと豫想された役割から、著しく歪んだ役割しか果すことができなかったことになる。

惟ふに、それは恐らく金爲替に於ける機能の性質上、上述せる特性の存在に基くものである。従つて貨幣制度上、金爲替準備に認められた從來の缺點を以つて、金爲替準備特に之を構成する金

4) Cfr. Mlynarski: Gold and Central Banks.
5) Piétritzki: op. cit. pp. 130-134.

爲替のもつ經過的特性によるものであるとし、従つてこの從來より缺點とされてゐる點の除却乃至修正に於いて、金爲替は一つの完全なる發行準備となるといふがごとき主張は、⁶⁾一見一應の意味を有つかのごとくではあるけれども、私見によれば此等は全く資本主義制經濟に於ける支拂信用乃至貸付信用の機能を理解せざるに基く結果にすぎないと考へられる。けだし、もし金爲替準備を構成する金爲替なるものが、本來かくのごとき支拂信用更には貸付信用の必然性に於いて考へられるものであるときは、そのかぎり右に述べたるがごとき金爲替準備を以つて經過的であるといふ主張は之を撤回せざるを得ないであらうからである。

併しながら、また一たび此の金融技術的視角を去つて、之を政治的に經濟的視角に於いて觀察し、此等の金爲替準備従つてはまた金爲替が、かくのごとき支拂信用又は貸付信用の意味に解されるに於いては、金爲替準備従つてはまた金爲替は、その時に於いてこそ、正にその正しい位相に於いて理解され、その獨自的な特性に於いて把握されるといふことになる。

ただ、今日世界經濟は著しくその政治的に經濟的方面に於ける不安に脅かされ、あらゆる意味の信認はその根底に於いて動搖しつつある。従つてその限り、金爲替準備に豫想された狀勢は、著しく歪められてゐる。かくのごとき事情に於いて、今もし、此の金爲替従つては金爲替準備の存在理由が比較的にいって認められ得るものがあるとすれば、即ちそれは一定の政治的、經濟的關係の下に支拂信用及び貸付信用の成立し得るブロック經濟に於いて、其の適例を見出し得る

6) 例へば Mlynarski: La réforme de l'étalon de change-or (Revue d'économie politique, Jan.-fév, 1930).

ものと考へられる。従つて、私見によれば、金爲替準備は近き將來このブロック經濟に對してこそ最も重要な課題となる。

唯、今、此の問題は私の直接の問題ではない。従つてその論議は別の機會に譲り、ここではこの問題に立ち入る前に、歴史的乃至實際的にその前提ともなり、且つ母國及び植民地關係に於ける貨幣制度に採用されてゐる金爲替準備を取扱ふであらう。蓋し、この事情は己にメリニャクが⁷⁾謂へることく、植民地銀行の成立が本質的に經驗的存在である點より、植民地銀行の成立はその對母國關係に於いて高度なる信認關係を一般に認め得るものであり、殊に今日の狀態に於いて信認成立の根據たる諸條件が充たされ得るものは、實にこの母國對植民地關係に於いてのみ僅かに見出され得るからである。就中、此の金爲替従つては金爲替準備が採用されるに至つたのは、たとひその存在が今日のごとく高度に金融資本的に非ずとはいへ、全く印度の英本國に對するがごとき、又はフィリッピン、中米、南米諸國が北米合衆國に對するがごとき特別な經濟的諸關係に於いて論證されるからである。⁸⁾

然らば植民地貨幣制度に於ける金爲替準備は、如何なる條件に於いて成立し、又如何なる意義を有ち、如何なる特性を有つものであるか、これ以下に於いて、私の順次取扱はんとする問題である。

7) Mérygnac: Traité de législation et d'économie coloniale pp. 150-152.
8) Piétritzki: op. cit. p. 132.

二、植民地貨幣制度に於ける金爲替準備成立要件

以上述べたるごとく、金爲替準備は植民地貨幣制度成立に於いて、特に資本主義制經濟の現發展段階に於いて、特段なる存在理由を有つものである。その事情に至つては必ずしも、皆同一基準に立つものではないが、併しながら常に一定條件がその決定に參與することも亦容易に首肯されるところである。

然らば此等の條件とは如何なるものであるか。此點に於いて先づ母國及び植民地間の政治的關係、特に經濟的關係が考慮さるべきである。このことは惟ふに、何人と雖も否定せざる點であらう。⁹⁾ 項を改め之を細論せんとするものである。

A 政治的關係——ここに政治的關係といふのは母國及び植民地間に於ける統治形式をいふのではない。また統治の實際をいふのでもない。従つて、この問題はその對象が植民地なるか、保護領なるか、國際聯盟による委任統治であるかといふがごときことは、皆論議の對象とはならない。問題はその母國對植民地間の政治的勢力關係の如何にある。¹⁰⁾

例へば、之を今日の二大植民地國たるイギリス及びフランスについて見やう。

先づイギリスについて之を見るときは、イギリス本國とそのドミニオンとの關係は、次第に従來の支配關係が薄らぎ、漸次協力關係に移らんとしつつある。¹¹⁾ かくのごとき政治的關係に於いて

9) Reynier. A : La Banque D'Etat du Maroc et les Banques d'émission coloniales. pp. 162-169 ; Le Branchu, J.-Y. : op. cit. pp. 225-226.

10) Le Branchu : op. cit. p. 225.

11) Cfr. Darling. J. F. : Stabilization of Imperial Exchange ; Times, Trade Supplement, May. II, 1921.

は、その母國たるとドミニオンたるとを問はず、貨幣制度上に於ける金爲替準備は、その關係一般に一の對外的關係に近づくを得ない。蓋しその相互間に於ける勢力關係は、必ずしも一方的に支配的視角に於いて認められず、従つて、金爲替準備により信用を中心とする貨幣制度は、協力的視角に於いて専ら考察されなければならないからである。此點に於いてオッタワ會議に基づく協定が考へられる。しかし單に之を以つて英帝國に於ける金爲替準備の成立に對する積極的根據とすることは、已にのべたるがごとく、金爲替自體が有つ貸付信用的關係から其の主張困難であり、この意味よりしてこれを他の諸國に於ける母國對植民地の政治的關係のごときものと同様に考察し、理解することはできない。

之に反し、フランスの對植民地の政治關係は著しく支配的である。又現在に於いてもこの色彩は謂はゆる母國中心主義たるに於いて極めて明瞭である。従つて、かくのごとき政治的勢力關係が一方的に強力なるに於いて、此の事情が已にのべたるがごとく、謂はゆる金爲替準備の採用を容易ならしめるの事情を語るものであることは疑ふ餘地なきところである。¹²⁾

要するに政治的關係に於いて、金爲替準備が植民地本位制に於いて採用されるためには、その母國の政治的勢力が植民地に對して一定の優位を示すことが極めて重要である。

B 經濟的關係——既にのべたるがごとく、母國及び植民地間の本位制を考察せんとするに於いては、政治的關係の考察は極めて重要であるが、之と共に或は之にも増して重要な問題は其

12) Reynier; op. cit. p. 156 et suiv.

の經濟的關係である。この一般原則については既に序言に於いても觸れたところである。即ち金爲替準備の成立は、金爲替が支拂信用又は貸付信用に關するものたるかぎり、それ自體母國及び植民地間の經濟的實情に就いての問題だからであるが、更にまた、此の種金爲替準備が、本來植民地に於ける銀行券發行準備に於いて、信用上極めて重大なる存在であることは、また以つて此の問題説明の重點が經濟的關係を無視しては、到底考へ得ざるものであることを證明するからである。

殊に植民地の經濟的事情にして、その母國より更に有利なる狀態を生ずるがごときことあるときは、此等兩者の實質的經濟關係は必然的に倒錯せざるを得ない。換言すれば若し、母國が上述せるすべての點に於いて植民地のそれに及ばざるに於いては、植民地はやがて自ら經濟上母國のなすべき役割を演じ、その本國の羈絆を脱するに至るであらうからである。

かくのごとく、母國及び植民地間の本位制を考察せんとするに於いて、政治的關係は同時に經濟的關係と離るべからざる事情にあることは容易に推定されるところである。此の點に關する經濟的關係については、先づ専ら母國及び植民地間、更には植民地相互間の商業的關係特に金融的關係が重要性を有つ。蓋し、植民地發券銀行に於ける金爲替準備の成立は、その成立自體に於いて母國及び植民地間、並に植民地相互間の通商關係の存在、從つて之に基く堅實なる通商關係の基礎の必要が考へられるのみならず、更に今日のごとく金融資本主義の展開し來るに於いて

は、そこに必然的に母國金融資本の植民地資源開發への參與を見るに至るものと考へられるからである。

要するに、植民地發券銀行に於ける金爲替準備の成立に對しては、通商關係と共に或はまた之にも増して金融關係が重要である。そは事實、經濟的には植民地に對して母國資本の參加を必要とするものであるが、そはその最初に於いては單なる資金融通關係に於いて考察され、又は考察され得たものであるが、資本主義の發展は、ここに金融資本的關係を成立せしめるに至つたからである。換言すれば、植民地に於ける金爲替は、其の最初は母國對植民地又は植民地相互間の通商關係の成立を目的とする上に於いて、即ち一種の支拂信用關係に於いて成立せるものであるが、更に其後の植民地の發展は資本主義制經濟の發展と共に、ここに必然的に母國金融資本の行動を見るに至つた。かくて、單なる支拂信用たりし銀行資本は、産業資本との結合乃至産業資本への支配によつて、ここに金融資本的貸付信用を生むに至り、此の事情は植民地に於ける發券銀行をして、ここに母國金融資本的信用による金爲替を發行準備とする制度の出現を見るに至つたものであると考へられる。例へば、イギリスに於ける對印度關係のごとき、フランスに於ける對アルジェリヤ關係のごとき、更にはオランダに於ける對ジャワ關係のごとき皆是れであつて、此等の關係植民地に於ける企業の大部分は、母國資本によつて構成され支配されてゐる。更に近く之を日本に於ける對植民地關係について見ても、その植民地關係資本は、少からず貸付資本的關

係にある事情を語つてゐる。

三、植民地貨幣制度に於ける金爲替準備の意義

今日世界に於ける先進資本主義國、特に植民地所有國は、實質的又は名目的な相違はあるかもしれないが、すべて金本位によつてゐる。蓋し今日の貨幣制度に於いては、金本位に依つてこそ其の放下又は投下せる資本は、常に國內のみならず其の植民地においてその價值の變動が比較的安全だからである。母國資本家はかくのごとく、對植民地關係に於いて、其の政治經濟關係を通じて、終始對植民地支拂關係のみならず、更には其の貸付關係をも安定ならしめんと希求することは、これ資本の安全確實を冀ふものとして正に當然といふべきであらう。

かくて植民地發券銀行には、金爲替なるものが採用され、金爲替が母國に對して重要な役割を占めるに至る。元來母國より見たる植民地貨幣制度なるものは、大體に於いて母國本位主義に統制される傾向にあるが、しかしこの場合に於いても、金本位制の採用のみでは爲替の變動は必ずしも免れ難い。即ち植民地は母國より、或は支拂信用或は貸付信用を受けて居るものであり、そのかぎり對外關係は勢ひ一方的となる傾向があるからである。そこに植民地に於ける金爲替の成立、従つては金爲替準備存在の意義が生れる。

此の觀點に關し、ウワリッドの主張は注目すべきものがある。¹⁴⁾ 彼はまづ「植民地銀行本來の活動

14) Oualid : Le privilège de la Banque d'Indochine et la question des banques coloniales pp. 4-5.

は、母國と植民地間に於ける爲替に對して行はなければならない。」と前提し、更に「この爲替は常に個人の商業上又は金融上の取引（輸出入の決済、有價證券の利札又は利子拂、資本の歸還）の清算を齎すのみでなく、更に資金の移動又は國庫事務の決済をも行ふ……。此の場合發券銀行は、母國との關係に於いて、その業務を取扱ふべきであり、爲替を中心としての役割及び影響に關する作用は、之によつて増進される」と述べてゐる。

かくのごとき植民地發券銀行が有つ爲替安定上の役割は、その必然的結果として植民地貨幣制度の對母國從屬性に關して重要な關係を示すに至るものである。このことはまた母國に於いて、金本位が採用される限り、それは、實質的の場合のみならず、名目的の場合に於いても、植民地發券銀行に於いて、金爲替準備のもつ意義に對して重要性を與ふるものである。

かくて、總じては植民地發券銀行の諸規定は、大いに母國發券銀行の諸規定に依存するところではあるが、¹⁵⁾しかしまた他方に於いては、勿論植民地經濟上の特殊性をも考慮しなければならぬ。¹⁶⁾蓋し、資本主義的に見ると、母國が歴史的に有つその經濟發展段階は、之を植民地のそれと同一視し得ないからである。この點はこの植民地發券銀行に於ける金爲替準備についても適用される。即ち、この金爲替準備の植民地發券銀行に於ける存在は、母國發券銀行の金又は金爲替準備の存在を前提として考慮されてゐる。此の意味に於いて、金爲替を所有する植民地發券銀行は、金爲替を通じて常に母國中央銀行の所有する金又は金爲替と深く結合されてゐるといふことに注

15) 朝鮮銀行：鮮滿經濟十年史 pp. 12-13.

16) 滿鐵調査課：各國植民地銀行制度 p. 77.

意を拂はなければならない。

更に立ち入つて謂へば、かくのごとき植民地發券銀行に於ける金爲替準備は、その構成内容が母國及びその植民地自體が有つ經濟と深く關係させなければならない。即ち、植民地發券銀行が金爲替準備を採用するに際しては、深く母國及び植民地の經濟的相互關係に考慮をむけなければならない。例へば、植民地が母國及び其他の植民地に對して有する貿易金額、その通商關係の重要度並に植民地の母國及び其他植民地爲替に對する需要度等々のごときこれである。此の意味よりして母國爲替と植民地爲替とは夫々植民地發券銀行によつて決濟さるべしとするがごとき考方は妥當でない。蓋し、植民地發券銀行は母國發券銀行に特殊の當座勘定を所有し、手形決濟はこれによつて行はるべきであるからである。

此等の事情に基き、フランスとその植民地アルジェリヤに於ける爲替の機構を吟味すると、この爲替は本來極めて變動の少い爲替であり、之に對して負擔すべき費用も亦、郵便費用に比較される少額である。フランス政府はかくのごとき爲替手数料を收納し、これに關する一の勘定を有つてゐる。この制度はラヴェルニユ¹⁷⁾をして「我々はもちろん此の制度がヨオロッパとその植民地について最善の形式を示すものであるから、その制度の將來に於ける希望を信じてゐるものである。」と述べしめてゐる。

然るに此の制度は、最近多くの非難の對象となつてゐる。その非難の中心はアルジェリヤを全

17) Lavergne, B.: La Banque de l'Algérie (Revue d'économie politique, 1918, p. 557)

然フランスの延長と見、アルジェリヤの特種性を見ない點にあるといはれる。

要するに植民地發券銀行の金爲替準備のもつ意義は、對母國經濟特に金融關係の重要視にある。従つて、金爲替準備の採用により母國發券銀行への結成を確實にし、植民地に於ける爲替の安定を維持することは最も必要とするところである。植民地發券銀行は之によつてその經濟的發展を促進し、之を管理して適當なる効果をあげ、合理的な範圍に於いて、その資金獲得手段の擴大と強化とををはからなければならない。

四、植民地貨幣制度に於ける金爲替準備の長所

一般に植民地貨幣制度に於ける金爲替準備が、その母國及び植民地關係に於いて認められる長所は、次の三點に歸着する。第一は母國及び植民地間に於ける金の節約であり、第二は此等兩者間の貿易の増進であり、第三は此等兩者間の連帶性並に團結性の發展である。以下更に項を分ち之を詳論するであらう。

(一) 母國及び植民地間に於ける金の節約¹⁸⁾——此の問題は植民地對母國の經濟的依存關係が如何なる點に於いて決定されてゐるかといふ點に關係する。例へば、一般に行はれてゐるごとく、母國關係の金爲替が植民地發券銀行の發行準備に於いて占める割合が比較的大であるといふことは、それだけ植民地發券銀行が母國發券銀行に統制される程度の大なることを示すものである。

18) Le Branchu: op. cit. p. 237 et. suiv.; Piétritz: op. cit. p. 29. of suiv.

併しながら、此の事情は他方に於いて母國發券銀行の信用上の變化がそれだけ植民地發券銀行に影響することとなるから、これを避くるの意味に於いて、前と反對の場合は、即ち母國發券銀行の支配並に監督に對し、植民地發券銀行の自律性を認めるに於いては、母國發券銀行の信用が植民地發券銀行に及ぼす影響はそれだけ少く、又植民地發券銀行の失敗も、その植民地自體に於ける自律性に基いて處理され、そのかぎり、それだけその影響の母國發券銀行に對する反動は少い。

此等二つの對立的な標準に基くときは、金爲替準備が植民地發券銀行に於いて考慮される重要度は、その植民地發券銀行の母國發券銀行に對する關係の程度を反映するといつて差支ない。そして總じて植民地發券銀行が母國發券銀行の管理を受ける程度の増大する傾向にあることは、そこに植民地銀行に於ける金爲替準備の成立と共に必然的に金の節約を惹き起すこととなる。

今フランスに於けるアルジェリヤ銀行の例を舉げると、その發行準備に於ける金爲替の占める割合は極めて低い。今一九二九年十月三十一日に於ける同行貸借對照表に於ける金爲替準備並に信用通貨の割合を示すと次のごとくである。¹⁹⁾ (單位百萬フラン)

金貨又は金地金	二〇六	有價證券	一、八七〇
在外正貨	二六五	アルジェリヤ銀行に於ける發行手形	一一二
在佛正貨	二八五	信用通貨	二、〇七二

今この割合を通貨發行高に對して比較すると、金は僅かに九・九パーセント、在外正貨は一二・

19) Le Branchu: op. cit. p. 237. 此の1929年の秋を採用したのは世界恐慌前に於ける正常時の状態を示せるものである。

八パーセント、在佛正貨は一三・九パーセントに過ぎず、その總計に於いても僅かに三六・六パーセントを占めるに過ぎない。そしてフランスに於ける此の事情は、例へば、アルジェリヤ銀行に於ける其の金爲替準備率を増加し、その母國發券銀行の中央集權的關係を増大せしめるの可能性を考へしめる。

之を要するに、今一國中央發券銀行に於いて、金爲替準備を採用せんとするときにおいては、植民地發券銀行の母國發券銀行に對する存在の仕方が、その植民地發券銀行の金爲替準備の在方を決定する上に重大なる關係を有つものであるといふことが一應考へられる。そして、植民地發券銀行に關してはその母國發券銀行への依存性を認める程度の増加するに従ひ、その植民地發券銀行の金爲替準備は漸く顯著となり、かくのごとき植民地發券銀行の有する依存性の程度の増加は、それだけ金爲替準備の採用に於いて、植民地發券銀行に於ける金の使用を有利ならしめるとともに、更に金の節約を將來するものであり、然らざるも、少くも同一金在高を以つてより大なる信用をより大なる程度に利用するに至らしめることとなる。

(二) 母國及び植民地間の貿易の増進²⁰⁾——總じて金爲替の成立は、二國間に於ける貿易の結果であり、然らざるもまた貿易を刺戟する要素であることは、特に説明を加へる必要もない。此の事情は母國及び植民地間の貿易についてもまた同様に謂ひ得られる。従つて、此等兩者間に於ける金爲替、更には又金爲替準備の増減は、此等兩者間の貿易關係に重大なる關係を有つこと、そは

20) Le Branchu: op. cit. p. 241 et suiv.

容易に判斷し得るところである

惟ふにかくのごとき金爲替の存在は、それだけ輸出入業者に對し、その必要とする爲替を一定の爲替率を以つて給付し得ることの確實なることを示すものであり、凡そ爲替手段に關し、かくのごとき明瞭確實なるものの存在することは、それだけ貿易に對し有力なる作用を及ぼす。

例へばル・ブラシウはフランスについて次の如く謂ふ。²¹⁾

「フランスに於いては、對外貿易は最近に於いて次第に減少してゐる。そして、その事情は貿易が今日次第に輸入超過を示してゐることを語るものであり、それはまた同時にフランスの有する對外投資が齎す結果を以つてしても、尙ほ且つその輸入超過を相殺するの困難なることを想はしめるものである。……」

「かくてフランスがその植民地に對して行ひつつある諸般の施設は、今日經過しつつある世界恐慌によつて著しくその發展進捗の度を阻害されつつあると云へる。従つて、植民地生産物の輸出困難は屢々植民地經濟の發展を困難ならしめ、その堅實なる展開を妨害しつつある。此の意味に於いて、植民地發券銀行に對して加へらるべき改善は、先づ少くも植民地發券銀行の信用を擴張し、その對植民地金融上占める地位を高めるとともに、その取引市場及び信用創造に關係せる力を認めることである。かくて、フランス植民地發券銀行に對しては、現在に於けるよりも一層大なる信用手段と、その信用手段の使用能力とを與へること、此等の點が母國發券銀行に設定さ

21) Le Branchu: op. cit. p. 241.

れた植民地發券銀行の金爲替を通じて、フランス本國並にその植民地の貿易を助成する有力なる原因たらしめることが重要であると考へられる。」と。

(三) 母國及び植民地間の連帶性並に團結性の發展——植民地發券銀行に於ける金爲替準備、從つては金爲替の存在は、對母國發券銀行關係に於いて最も緊密なる連帶性を生ぜしめる。蓋し、植民地發券銀行が、母國發券銀行に於いて有する、例へば當座勘定の運用は、必然的に植民地の對母國關係の結合に與るからである。實際また一般的なる意味に於いて、母國發券銀行は正に植民地の手形決済機關でもある。

各植民地はかくのごとき對母國關係に於いて、その全一體性を理解し、それだけ母國及び植民地關係に於ける協同關係、從つては連帶關係を密接強固ならしめるに至ることは、蓋し極めて重要である。此の意味に於いて、我々が特に金爲替從つては金爲替準備を通じて注意すべき點は、母國對植民地の全體に於いて行はれる政策が、母國中心主義にのみ傾いて行はれてはいけなまいふことである。そはどこまでも植民地をも含み、之を對象として考慮されなければいけない。この傾向は今日の事情に於いては、實際上餘り重要視されてゐないやうである。だが、この全體性への見透しの要求は之を無視して到底その目的を達成し得ない。

五、結 言

以上之を要するに、植民地貨幣制度に於ける金爲替準備は、今日の經濟的實情よりして貨幣制度上、最も注目すべき重要問題の一である。今日一般的なる金爲替準備は、その存在が既に國際間に於ける信認の成立を前提としてゐる點から、その理論上に於ける要求の高度なるにもかかはらず、其の實踐上に於ける要求は極めて低い。けれども、此の事情は國際間に於いて然るのみである。之を以つて直ちに發行準備としての金爲替の存在を否定することを得ない。

今日國際間の事情は、謂はゆるブロック經濟の成立を次第に促しつつある。この傾向によつて示されることは、相互に信認を認めざる國際經濟は、まづその主要國を中必としてその植民地、保護領又はその勢力範圍を含むブロックを形成しつつあるものであり、かくのごとき見方にして認められるとすれば、そのブロック經濟に於いて採用され、又は採用され得べしと考へられる貨幣制度は、資本主義のかぎりその支配國を中心とする金本位特に金爲替本位であることは、以上述べたるところよりして明かである。

元來、貨幣には個人的觀點から考察される方面と、社會的觀點より考察される方面とがある。そして、個人的觀點に立つかぎり、貨幣は價值の尺度であり、従つてその意味に於いて交換の手段であるが、社會的立場に於いては、屢々交換手段たることが最も重要視される。總じて今日こ

の種貨幣を以つて交換手段と見なし、その點より貨幣本位を決定し、貨幣に對し統制を加へ得る
と見る、それは最近に於いて擡頭し來れる全體主義又は團體主義的經濟による見方の齎せる影響で
あらう。この問題は、今ブロック經濟に於いて如何に取扱はるべきであるか。私は此の場合に於
いても、資本主義の原則による限り、少くも國家間には自國主義の原則が適用されると考へる。

従つて、その限り世界主義が成立せざる以上、即ち國家を單位とする經濟が行はれる以上、貨幣
を以つて價值の尺度と解するの見解に従はざるを得ず、従つてまた其の必然的結果として金又は
金爲替準備の廢棄は之を考へ得ない。かくて、金爲替準備が有つその支拂信用手段的見解に於い
ては勿論、更にまた進んでその貸付信用手段的見解に於いても、ブロック經濟的立場に於いては、
金爲替準備の重要視せられることは當然であると謂はざるを得ない。

私は、かくのごとき見方の一面として、今植民地貨幣制度に於ける金爲替準備を取扱つた。由
是觀之、謂はゆる植民地が母國に對する結成關係は、現段階に於いて最も新しい形式に於いて、
金爲替準備の存在を理由づけるものと考へることは、惟ふに必ずしも否定すべきではないだら
う。むしろ、今日のごとき國際經濟に於ける信認成立の否定に際しては、金爲替準備自體の存在
を理由づける最も注目すべき方面は、この植民地貨幣制度に於ける金爲替準備に於いてこそと考
へられる。そしてまたそれは、金融資本的勢力の膨脹し支配し來れる時代に於いて、正に再検討
せらるべき本位問題でもある。

最近に於ける金生産問題は、バアゼルの國際決済銀行の發表によると、嘗てジュネヱヴ國際聯盟に於いて發表せるところと正に相反し、むしろ其の生産高は逐次増加の傾向にある。²⁴⁾しかし之を以つて私は簡單に直ちに金本位復活の可能性を信ぜんとするものではない。今日世界に於いて信認は、全く不安定そのものであり、しかも各國の平價切下に關する見透しの困難は、金生産の増加にも拘らず、動々もすれば金配分の均衡を益々困難ならしめるの事情にある。

従つて此の事情を繼續することは、一方ブロック經濟内に於いて特に母國植民地間に於いて、金本位を採用せんとするの事情あるにもかゝらず、依然として之を阻害するものであり、此等の事情を以つてして尙ほ金本位によらんとするの事態は、これ亦依然として必然的に金爲替本位の採用を以つて満足せざるを得ないこととなる。信認關係の比較的高度であり、しかも其の限り、益々母國金融資本の活動を認めざるを得ない植民地銀行に於いて、發券準備として純粹なる金の採用困難なりとすれば金爲替が採用されるであらうといふことは寔に當然すぎることに謂はなければならぬ。

唯此等の母國植民地關係に於いても、謂はゆる支拂信用的金爲替従つて其の準備は、イギリスと其のドミニオンとの關係の如く協力的色彩が認められる範圍に於いて特に明瞭なるに對し、貸付信用的金爲替従つて其の準備は、フランスと其の植民地との關係の如く支配的關係が認められる範圍に於いて特に顯著である。そして此等二つの傾向のうち特に後者の如きものは從來専ら金爲替を金融技術的關係に於いて見たものゝ全然考へ及ばなかつた點である。

24) Cfr. Information financière, 1er 17, mai, 1934.